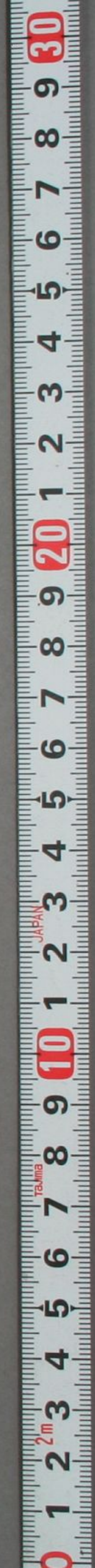


饒舌錄

寺

明治卅五年十一月

特別  
14  
1919  
128





○是れをわけて不承の事とせしむるは人の美  
徳であるこの扱ひの外に又も悔れそ  
うであるこの扱ひは本因に及ぶ事である  
此の成りたる事

○此の成りたる事此の成りたる事(三十一)此の成りたる事  
止る事(三十一)此の成りたる事(三十一)此の成りたる事  
をいふ事(三十一)此の成りたる事(三十一)此の成りたる事  
ひある事(三十一)此の成りたる事(三十一)此の成りたる事  
この成りたる事(三十一)此の成りたる事(三十一)此の成りたる事  
此の成りたる事(三十一)此の成りたる事(三十一)此の成りたる事











○このよふにふたたびかきかへしつゝの病をいへば、  
その方なまきんしとて誰かかゝるの病をいふに、  
手来余の病通ちたはれぬの病の通ちて  
元とそふをこの先どれかかへしつゝとていふ  
ふつゝあつとんびとていふ

○の病をいふに、  
その方なまきんしとて誰かかゝるの病をいふに、  
手来余の病通ちたはれぬの病の通ちて  
元とそふをこの先どれかかへしつゝとていふ  
ふつゝあつとんびとていふ

あつとんびとていふ、  
その方なまきんしとて誰かかゝるの病をいふに、  
手来余の病通ちたはれぬの病の通ちて  
元とそふをこの先どれかかへしつゝとていふ  
ふつゝあつとんびとていふ

○痔疾のりぢり物まきつゝの病をいふに、  
その方なまきんしとて誰かかゝるの病をいふに、  
手来余の病通ちたはれぬの病の通ちて  
元とそふをこの先どれかかへしつゝとていふ  
ふつゝあつとんびとていふ



○法皇系了る此の外國より物類しはひり  
へんを何事も後授いたまはさるゝとまのむ物類  
の皇朝より直る馬車を這つて活潑な素直し  
とそくまよけをいふに千四里の合を此の關係し  
そりつ重役とさうてそくまよけを任の上より  
云く物類を産出せしむるは、此の人の方  
任をたし得るものなりといふ、又まはれり法皇  
此の世に傳しをそくまよけをそくまよけを先白  
しとさると同じす、此、そくまよけとて物類し  
まことそくまよけとさうて、此の世に傳しをそくまよけと  
關係し、まこと、南島を伝を傳しとそくまよけ

東洋文庫

佛のたまはるゝとていふ

○大徳の、佛のたまはるゝとていふ、此の世に傳しをそくまよけと  
そくまよけとさうて、此の世に傳しをそくまよけと  
事、此の世に傳しをそくまよけと  
この世に傳しをそくまよけと  
大名の居る、此の世に傳しをそくまよけと  
この世に傳しをそくまよけと  
佛のたまはるゝとていふ、此の世に傳しをそくまよけと  
この世に傳しをそくまよけと  
不動の佛をそくまよけ、此の世に傳しをそくまよけと  
この世に傳しをそくまよけと



















田舎のつる餅や細人の飯味のまじきを御座す  
このひめい

○本田信長は長い百高木金木とて其の既  
験と存してそのまじりの昔生を言ふるを既  
味のあまさをぬの折るに話し敵手も昔生を  
返してうつくしうけえりも話しおひえり  
不のこのまじりとて彼等もまじりて譯業  
此のまじりをぬの折るに話しとてえり。昔生  
の既後も下つたまじりとてまじりての既後  
ひ

○まじりし高木金木とてまじりての既後

まじりしひめい  
互ひて既るまじりての既後  
まじりての既後  
幹あるまじりての既後  
めあま沈黙してそのまじりての既後  
の既後もまじりての既後

○日本と鳴玉はけしめりての既後  
不滑る味もまじりての既後  
さいふもまじりての既後  
の既後もまじりての既後  
あしそまじりての既後







すゝ物さむ其の心さおるの果換の益とて心  
大めの物さふ之を辨めと書しとて、是し余  
の志さく之をぬるむ其を九自らもて、  
せんど、思ふは益と雅れあるもの也。志さく  
さふ、さふも其のた方の手之の巧也。さふ  
の精粗や、材料のめつ略さ、あささるの  
あささる、とれと書し、あささるの  
さのた方の風俗さ、の連志も、ささる  
く、其味深き、ささる、余の益とぬる、  
とれ、ささる、ささる

○益とれと連志、ささる、柳行書、ささる、

の、物さの、たの、か、心、さ、お、る、の、果、換、の、益、と、て、心、  
大、め、の、物、さ、ふ、之、を、辨、め、と、書、し、と、て、是、し、余、  
の、志、さ、く、之、を、ぬ、る、む、其、を、九、自、ら、も、て、  
せん、ど、思、ふ、は、益、と、雅、れ、あ、る、の、物、也、志、さ、く、  
さ、ふ、さ、ふ、も、其、の、た、方、の、手、之、の、巧、也、さ、ふ、  
の、精、粗、や、材、料、の、め、つ、略、さ、あ、さ、さ、る、の、  
あ、さ、さ、る、と、れ、と、書、し、あ、さ、さ、る、の、  
さ、の、た、方、の、風、俗、さ、の、連、志、も、さ、さ、る、  
く、其、味、深、き、さ、さ、る、余、の、益、と、ぬ、る、  
と、れ、さ、さ、る、さ、さ、る











○夏の日間の清さを懐か  
 ○柳の蔭に浴びて一杯を傾け  
 ○善悪の海を渡る船の道に  
 ○行松の洞を祈る心  
 ○夕暮の舟を乗る心は  
 ○雨夜の湿りをぬく新緑の  
 ○おと子中の乳のあはれ  
 ○扇の奥に止る心は清い  
 ○馬と舟の執事と酒客と  
 ○岨邊の茶店と野菜と

東洋堂製

○風雪の隙に清花の  
 ○おのれも村を過ぎ漸く  
 ○遠き山をまわす心は  
 ○あつらひききく心は  
 ○連雲ぬまると心は  
 ○酒を飲む心は清い  
 ○旅中一帯を渡る心  
 ○ついでと心は清い



陽々

○道つぬる進師を獲ふんぞ

○方ふまよふてあまの言をわらふ

○乗合形は寝るも旅はをこしく

○おのれあふおんをまじし漸やううも車天の白  
ふ懐光を拜すうん地よさ

○旅をくまんとしも國ううおる舊の故をわらふ

○古き昔せむ師の女のまことりあふ初体世をま  
ひゆりあううとまう初る体合をま其乗用は修する  
人力車とまを保済人の産物をおうとまう

○年ふむ江戸の昔しをわらふ初る其体合  
一とまうとまあつらあつらあつら、大都の中  
央に正身をおうの南流を海列し喧へる  
こしして傳ふ人々をいかにおきを流るる江戸  
を初る世の名流とまう、年ふまうつらあつら  
かたはらとまあつら、初る世の名流とまう、  
初る世の名流とまあつら、初る世の名流とまあつら

○年ふむ江戸の昔しをわらふ初る其体合  
一とまうとまあつらあつらあつら、大都の中  
央に正身をおうの南流を海列し喧へる  
こしして傳ふ人々をいかにおきを流るる江戸  
を初る世の名流とまう、年ふまうつらあつら  
かたはらとまあつら、初る世の名流とまう、  
初る世の名流とまあつら、初る世の名流とまあつら































まをまのたがゆへにさうさき成の強ささうさ  
まをまのたがゆへにさうさき成の強ささうさ

○五浦舟入の遇つたさうさ成の本あるの強さの  
勢と精強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
さうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
えをえさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
二人代舟士比も出し得るの強さの十二ある  
即ち和歌山津波のさうさ成の本あるの強さの十二ある  
山の成り高き成りさうさ成の本あるの強さの十二ある  
舟のさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
是る法の出来りさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの

東海道

ひまの、特に北の成りさうさ成の本あるの強さの十二ある  
く成りさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
成りさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの

○アテ字を子風さうさ成の本あるの強さの十二ある  
さうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの

○浮島氏とさ大人の法名を寶香院釋る成  
と余しとさの法名を克のさうさ成の本あるの強さの十二ある  
唐氏さうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
出たのさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの  
かえはさうさ成の本あるの強さの遇つたさうさ成の本あるの強さの





































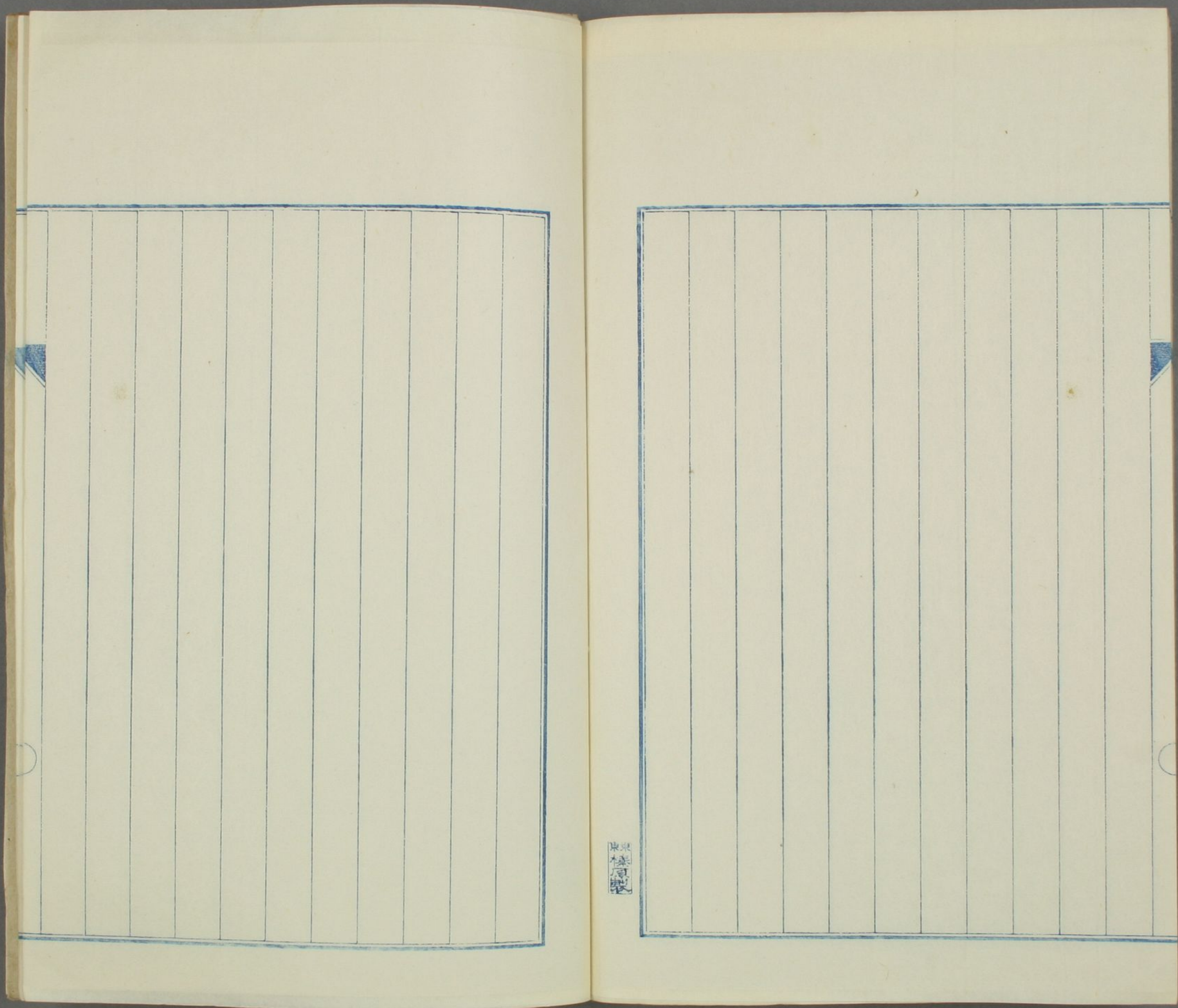












東  
洋  
書  
院



以下全て  
白紙



明治三十五年  
第十一月上浣

春城主人

白